愛のひと 野口ゆか

「かーごめ、かごめ、かーごのなーかのとーりーはー。」
子どもたちの明るい笑い声が園庭にひびきます。どの子ども笑顔で、目はいきいきとかがやいています。

園庭で遊ぶ子どもたちの様子を、あたたかく見守っている女の人がいました。めぐまれない家庭の子どもたちのために、ほ育園をひらいた人物、野口ゆかです。

ゆかは、一八六六（慶応二）年、今の姫路に生まれ、やさしい両親のもとで大きな愛じょうを受けて育ちました。本が好きなゆかのために、お父さんは本を借りてきては、読ませてくれました。ほがらかなお母さんのもとへは、多くの人たちが集まってきました。ゆかの周りはいつも明るい笑顔があふれていました。

こうして両親の愛に包まれながら、ゆかはかしく思いやりのある子に育っていきました。

ある日、ゆかは、近くに住むおばあさんが、炭がなくてこまっていることを知りました。ガスも電気もない時代です。まきや炭で火を起こし、夜はろうそくをともしてくらしていました。

「おばあちゃん、この炭を使ってちょうだい。」

ゆかは自分のうちの炭を持っていき、あげてしまいました。

「ありがとう、ゆかちゃん。おかげでご飯をたたくことができますよ。」

おばあさんがよるこぶすがたを見て、ゆかはとてもうれしくなり、心はずませて家に帰りました。

しかし、家では、お母さんがこまった顔で何かをさがしていました。

「炭がなくなっているのよ。ゆかちゃん、知らない?」

ゆかは「あつ。」と思いました。自分の家のことを考えていなかったのです。ゆかは、近所のおばあさんにあげてしまったことを正直に話しました。お母さんは、そんなゆかをしかることはありませんでした。

またある日は、となりの家のお手伝いさんが、足がいたくて歩けなくなっていることを知りました。行ってみると、足がただれ、すり切れています。あかぎれだとわかったゆかは、
「いいものがあるから、待っていてください。」

と言って山へ行き、すぎの油を集めてきました。いつかおかあさんから聞いた「すぎの油があかぎれにきく」という話を思い出したからです。小さな子どもが、すぎの油を集めるのは大変なことでした。それでも、こまっている人のことを思うと、じっとしていられないゆかでした。

そんなゆかが、大きな悲しみにおそわれたのは、一九才のときでした。心のささえた両親が相次いでなくなってしまうのです。大切な家族を失ったゆかの悲しみは、はかりしれないものでした。

「お父さん、お母さん、これからわたしはどうしたらいいの？」

いく日もさびしさとせつ望の中にしたゆかでしたが、ある日、いつもお父さんが言っていた子どもはたからだ」という言葉を思い出しました。

「そうだ、お父さんとお母さんがわたしの力になってくれたように、今度はわたしが子どもたちの力になるよ。」

その決意が、ゆかを悲しみのふちから立ち上がらせました。

ゆかは東京へ出て、ほ育園の先生になりました。しかしそこは、ゆたかな家庭の子どもたちだけが集まる、かぎられた場所でした。町には食べるものがなく、おなかをすかせてない子どもがいます。当時は、ほ育園に行きたくても行けない子どもたちがたくさんいたのです。ゆかは心をいためていました。

「めくまれない子どもたちが通えるほ育園はないものだろうか……。」

ゆかの心の中で、「子どもはたからだ」と言ったお父さんの言葉がよみがえってきました。

「わたしがつくるよ。めくまれない子どもたちのために、これからわたしのすべてをささげよう。」

やがて、ゆかによって新しいほ育園が作られました。そこは、ゆかの生き方そのものをえがき出したようなあたたかい場所になりました。

「かーごめ、かごめ、かーごのなーかのとーりーはー。」

今日も子どもたちの笑い声が園庭にひびきます。

「先生、いっしょにかごめしよう。」

子どもたちに手を引かれたゆかは、笑顔でかごめの輪の中に入っていました。

こうして、日本で最初の、めくまれない子どもたちのためのほ育園がたん生したのです。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。